

氏 名 清 水 郁 郎

学位（専攻分野） 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大甲第496号

学位授与の日付 平成13年3月23日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 北タイ・アカの家屋に関する研究

—家屋の形式とその変化への視点から—

論 文 審 査 委 員	主 査 教授	長野 泰彦
	教授	杉島 敬志
	助教授	佐藤 浩司
	教授	畑 聡一（芝浦工業大学）
	教授	小野澤 正喜（筑波大学）

論文内容の要旨

タイ国北部の山地に居住するアカの中で、とくに現在まで霊的信仰を保持し、祖先から伝えられた慣習を持つロウチと呼ばれる者たちのあいだでは、家屋の屋内空間が大きく2つに分割され、そのそれぞれが男性と女性の居室にあてられている。ロウチのあいだでは、こうした空間構成ばかりでなく、家屋の構造や構法にも広く共有されている方法があり、それらに執着する度合いが相当に強い。一方、同じアカの中でもキリスト教徒のあいだでは、ロウチのように家屋の形式への執着が薄れ、内部空間や構造がロウチとは異なる形式で家屋を建設するという特徴が顕著である。

本論の目的は、ひとつの村にロウチとキリスト教徒が混在するこうした現在の状況を踏まえて、アカの家屋とその変化が住み手とどのように関係しているのかをあきらかにするものである。そのさい、本論では、家屋と住み手の両者と、その背後にある文化や社会との対応関係は無前提に想定しないで、家屋とその形式的側面を扱う。住み手を取り巻く現実の社会の変化や、個々の住み手の多様な営為によって、家屋の形式もまた変わりゆくことに留意しながら、家屋と住み手との複合的な関係の中から、住み手がどのように決まってくるのか、また、住み手が家屋に住むことの意義をどこに見出し、家屋の形式がどのように決められるのかという側面を視野に入れる。

7章からなる本論の各章の論述内容は、以下のとおりである。

第1章では、本論の目的を述べた後に、先行研究の検討から本論を位置づける。また、調査地の概要と本論の構成を示す。

具体的な記述をはじめ第2章では、ロウチの家屋と屋敷の形式面の特徴を全般的にあきらかにする。また、家屋の空間構成や構造、構法には、ロウチに共有された形式があることをあきらかにする。

第3章では、このような家屋の形式面の特徴を、世帯における男女の行為や、ロウチに共有された神話的な説話などから考察し、ロウチの世帯の特徴、および、ロウチの家屋には、複数の二項対立的、相互補完的な分類観が並存することをあきらかにする。

こうした分類観は、家屋の空間構成や構法などの形式と関連づけられるが、それがまた、ザンサンホと呼ばれる慣習と結びつくことによって、家屋の形式はロウチのあいだに共有されてきたと考えられる。第4章では、このようなザンサンホの意味解釈を家屋との関係から考察し、ザンサンホには、その意味内容よりも、祖霊や外部の霊などの霊的存在との関係を含意するところに特徴があることをあきらかにする。

第5章では、ザンサンホに含意される霊的存在との関係を、家屋に設置される祖先の祭壇や系譜に着目して考察する。その中で、家屋の中に祭壇を持つことは、ロウチのアイデンティティと密接に関連することをあきらかにする。

家屋の中に祖先の祭壇を設置することは、ロウチの家屋の形式にもっとも大きな特徴を与えるが、現在では、祭壇を捨ててキリスト教徒になる者も多い。キリスト教徒は、祭壇を捨てることで、祖先との紐帯を維持しなくなる。さらに、ロウチとは異なる形式の家屋を建設することが多くなる。第6章では、キリスト教徒は、祖先との紐帯やザンサンホをどのようにとらえているのかを具体的にあきらかにしながら、キリスト教徒の家屋の特徴を示す。

第7章では、第6章までの論述を総括し、本論の結論と今後の課題を述べる。

本論では、以上のような論述から、つぎの点を指摘する。

北タイのアカの事例の分析から、家屋と住み手との関係が、相互に作用しあう複合的な関係であることをあきらかにした。ロウチの目の前に投げ出された家屋やザンサンホは、その意味内容が理解できなくても伝えられる形式を持つ。ロウチは、家屋に住み、ザンサンホをおこなうことを通して、自身がロウチであることを確認しているかのように見える。しかし、そうしてロウチに読まれた家屋は、多様に解釈されるために、その形式が変化する可能性がある。変化した家屋は、住み手であるロウチによって再び読まれ、位置づけられる。家屋と住み手がこのように相互に作用しあうことで、家屋の新たな形式が生まれ、古い形式が失われる可能性がある。同じことは、ロウチのあいだだけではなく、ロウチとキリスト教徒を含めたアカ全体の中でも起こりえる。その場合、ロウチであることとはなにか、アカであることとはなにかといったことが問い直され、議論される。家屋の形式について、さまざまな解釈や議論が起こる局面には、アカが揺れ動く様態があらわれていると結論づけられる。

論文の審査結果の要旨

本論文は北タイに居住するアカの家屋に関する研究であり、その建築構造とそれが変化しつつある現状を、ミッシヨナリーの活動をはじめとする外部からの影響を受けて大きくゆらいでいる文化の諸側面と関連づけて記述し、分析をおこなったものである。著者は2年数ヶ月におよぶ現地調査と周到な文献研究にもとづいて論を展開している。

第1章ではタイの山地民研究や家屋の人類学的研究を批判的な観点から整理し、本研究の目的を明らかにしている。第2章と第3章ではアカの家屋の建築構造をその空間構成だけでなく、材料や工法にまでふみこんで記述するとともに、アカが家屋を中心にどのような生活を営んできたかを克明に記録している。また、第4章と第5章ではアカの生活の根底を支えてきたザンサンホとよばれる慣習の体系と家屋とが複雑にからみあっているありさま、そして家屋がザンサンホにもとづく生活を持続させる装置として機能していることを明らかにしている。つづく第6章ではキリスト教に改宗したアカがザンサンホを放擲し、これまでにない建築構造の家屋が出現するようになった状況のなかで、アカの文化的アイデンティティが多様化し、それが家屋の建築構造や家屋における生活実践をめぐる語りのなかでせめぎあっている事態を鮮明に描き出している。そして、終章にあたる第7章では、第2章から第6章までの内容を要約するとともに、今後の研究の展望と将来の課題についてのべている。

本論文は人類学と建築学との境界領域に新生面をきりひらいた研究といえる。人類学では文化の全体像をえがきだす民族誌研究の一環として家屋に関する研究がおこなわれてきた。しかし、その多くは家屋の空間構成とそこに内包されているシンボリズムに焦点をあてたものであり、本論文のように家屋を工学的側面を含めて全体的かつ体系的に考察した研究はまれであった。また、建築学の分野では建築物をそこに住む人々の生活や文化と関連づけてとらえる必要性が認識されてはいたものの、本論文のように長年にわたる現地調査からえられた資料にもとづく研究は皆無に近かった。したがって、本論文は人類学と建築学における家屋研究を融合することによって、この両者がかかえる限界を克服する方途を具体的に実践している点で画期的である。また、人類学と建築学との境界領域には学問的に開拓されるべき分野が広がっていることを主張している点で、本論文は大きな意義をもつ。さらに、人文・社会諸科学のさまざまな研究分野で現在さかんに論じられている文化的アイデンティティの「構築」や「創造」といった問題を考える場合、従前見過ごされがちであった住まいとそこでの生活実践が重要な手掛かりを与えうることを実証した点においても、本論文の記述と分析が持つ価値は高い。

以上のように本論文は全体として高く評価できる内容をもっており、学位を授与するに価するものと認定する。